



「さても、おそろしい水のカ。あの丘も、この村も、みんな昨日の夢と消え果てて：：泣き叫ぶ村人の声は、さながら地獄におちし そのままだ。」

「いや、いや。悲しんでいる時ではない。」

「この稲津弥右衛門頼勝の覚悟はできておる。そう
だ。覚悟はできている。」

「ここじゃ、ここじゃ。ここにおいでなされる。早う
来なされ。」

「ここにおいででございましたか。稲津様！」

「弥右衛門様に早うお会いせねばと、急いで参りました。」

「おお、これは庄屋どの。植柳村の庄屋どのをはじめ
さぞかし大義であろうな。」

「何をおおせになります。あなた様こそさぞかしお
疲れのこととお察しいたします。」

「いや いや。わしのことは、決して心配くださるな。
お殿様重賢公の前で『必ずこの萩原堤を見事につきあ
げてごらんにいます』とお誓い申し上げた。その時
から、わしは命をすててかかっている。：。」

「ありがたいお言葉。村の衆も稲津様のお指図で働く
のを心待ちにしております。」

「そうともそうとも。この弥右衛門の命にかけて成就
させずにおくものか。」

「先日より 調べ方を進めておる。こんどの大水害
もう調べはすんだか。」

「はい。おおよそのところ 田んぼや畑の被害が三万
五千町歩。」

「流されました家の数 二千百十八軒。死んだ者 五
百六人。」

「流されました八代みかんの木が二百六十本。こわれ
た橋が 百九十五カ所」

「流された牛や馬が五十八頭 まだまだ あるいはかと
存じます。」

「申し上げます。人夫の者 続々と 集まりましてご
ざります。ただ今ここへ連れて参りました。」

「おう おう 集まったか。どうじゃ。みんな 元気
を出して働けそうか。」

「それはもう、たいしたものでございます。男も女も
あなた様のお覚悟を聞いては『ありがたい ありがた
い』と申し、一同、決死の覚悟を致しております。」

「申し上げます。かめの用意できましてござります。」



「おお、よしよし。ここにすえてみよう。うむ・あふれるばかりの金が入っているのう。」

「ただ今 人夫一同 到着いたしました。」
「おお、待っていたぞ。さあみんな これへこ
れへ。」

「ただ今 まいりましてございります。」

「よしよし。みんな ご苦労、ご苦労。この
度の工事は 一日もゆるがせにはできぬ工事。
みな、みな、覚悟はよいかの。」

「大丈夫 大丈夫」

「女心もひとすじに」



「あっぱれじゃ、みなもの者。ほうびはそれ、このとおり。かめの中の金。毎日、そなたたちの手につかめるだけは進ぜるほどに、うんと働いて帰りにには、こうして、つかんで……。よいか。」



「はいはい、承知つかまりました。」

「それ、始めるぞ!」
「あいよ!」
「それ、かかれ!」
「おう!」

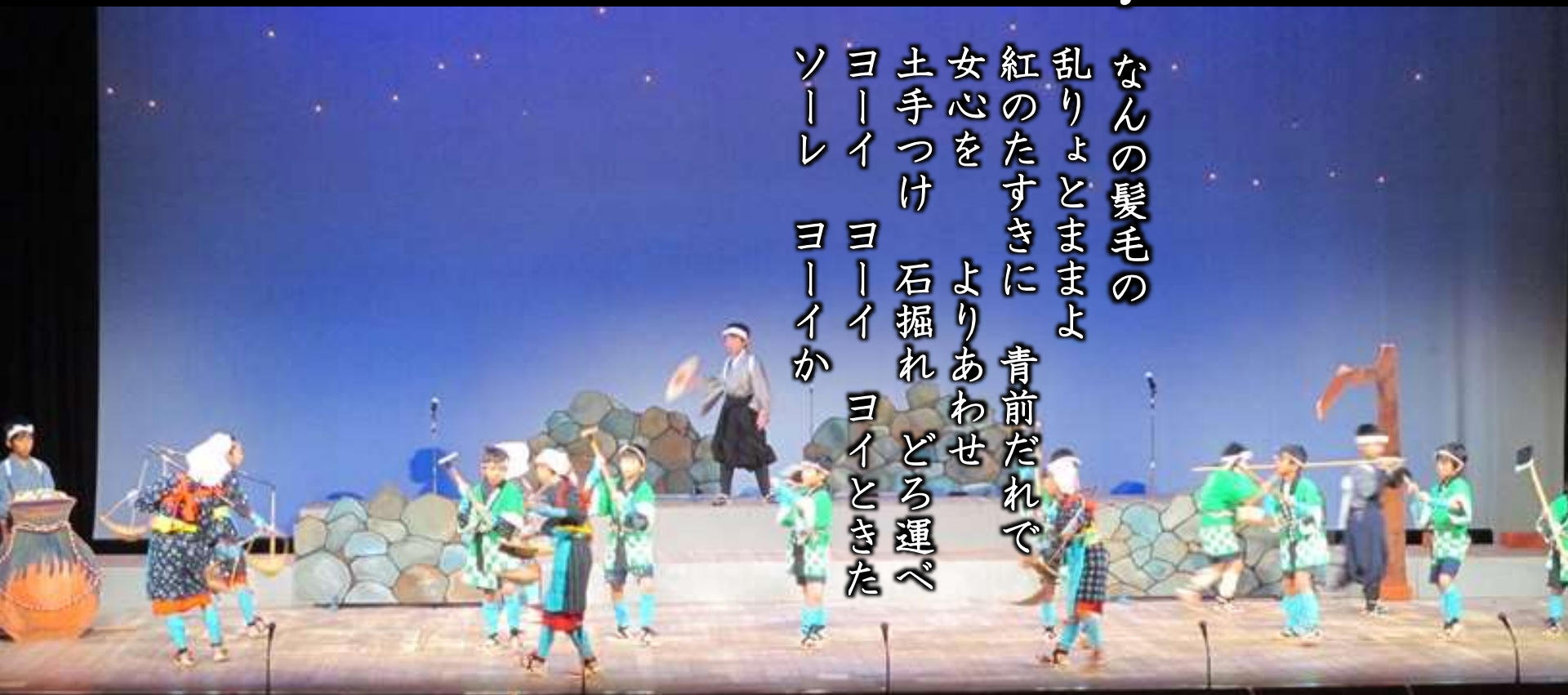
♪ 築堤の曲

なんのこれしき 水ではないか
腕をめぐって 鉢巻きしめて
男度胸だ がんばとあたれ
土手つけ 石掘れ どろ運べ
ヨーイ ヨーイ ヨイとききた ソーレ





なんの髪の毛の
乱りよとままよ
紅のたすきに 青前だれで
女心を よりあわせ
土手つけ 石掘れ どろ運べ
ヨイイ ヨイイ ヨイとききた
ソイレ ヨイイか



稲津弥右衛門は、昼も夜も休みなく、寝るまもなくかけめぐり、村人たちの指図をしてまわられたそうじゃ。

こうして、稲津弥右衛門と村人たちの力で、萩原堤が難工事の末に、ようやく出来上がったそうじゃ。

何とたったの七日間でな。